

公開・国際シンポジウム「聖遺物とイメージの相関性 東西比較の試み」

## 黄金の肌、光を放つ骨

—中世の知覚における聖遺物と聖遺物容器の融合—

スコット・B・モントゴメリー

秋山 聡 訳

ここに司教マルティヌス眠る、聖なる記憶とともに、その魂は神の手の中にあるが、彼は完全にここにおり、ありとあらゆる種類の奇蹟の中に顕現している

この銘文は、トゥールの聖マルティヌス教会にある彼の墓にあるものだが、中世文化における聖遺物の効力を強調している。聖遺物は聖人の、死後も地上において継続する存在と力を文字通り体現しているのである。聖人たちは中世における信仰心の中で、この碑文にあるように、二つの市民権というこの基本的な教義によって、つまり聖人たちが天国と地上の両方に同時に存在することにより、その地位を維持し続けてきた。彼らの居場所は彼らの身体的な遺物つまり聖遺物の中に明白に保たれたのである。このはっきりとした現前の結果、天国との直接的な通話の回線として、聖人とその遺物は、熱烈な祈りの対象であった。人が聖人に対して祈りを捧げると、奇蹟の恩恵を被ることの両方において。それゆえ聖遺物信仰は否応なく行為をとまなうものであり、祈りの劇場の中で、ありとあらゆる感覚と感情を利用して対話をもたらすものなのである。ニュッサのグレゴリウスが記すところによれば、

それらを見る人たちは、あらゆる感覚、目や耳や口を総動員させて、いわば身体をその生前の絶頂期におけるものであるかのように祈りを捧げ

る、そして、畏敬と情熱の涙を流して、彼らは、殉教者があたかも生きて  
いるかのように執り成しの祈りを唱えている<sup>2</sup>

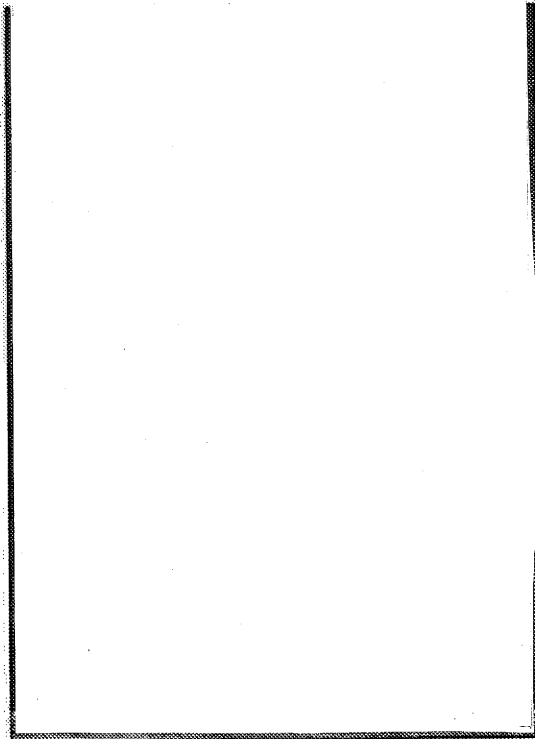


図1 ケルン大聖堂、三王の聖遺物容器(シュライ  
ン) 正面

聖遺物がこのような激しい情熱  
と祈りを引き起こすのであれば、聖  
遺物容器がその貴重な内容物を保  
管するだけではなく、その現前性  
と力という性質についての視覚的・  
テキスト的そして象徴的な説明を  
施していることは驚くにあたらな  
いであろう。

すべての聖遺物容器は、視覚的  
に、中にある聖遺物の現前性と力  
に関する様々な側面をはっきりと  
示す。単純なレベルでの、容れ物  
としての聖遺物容器の役割は、聖  
遺物がそこにあるという事実を意

図2 ケルン大聖堂、  
三王の聖遺物容器  
(シュライン) 側面

味することにある。ありふれた家形聖遺物容器は教会と聖遺物の間の形式上の視覚的つながりを促進するだけでなく、聖人が永遠に居住する場所としての容器の役割をも示唆している。しかも、銘文と造形的な表象は、叙述的なものにせよイコニックなものにせよ、通常は聖遺物の真の実在とその真正性についてのこの暗黙の了解を増大させる。

ケルン大聖堂にある三王の聖遺物容器（図1、2）の正面に見られるように、そのような図像はまたこの聖遺物の重要性を説明し、そしてそれらの奇蹟を起こす力を暗示している。三王の礼拝の場面は、キリスト

に祈りを捧げる最初の巡礼者としての王の重要性を強調している<sup>3</sup>。王自身を、キリストを拜む巡礼者として提示することにより、この場面は王たちと容器にひざまずき祈りを捧げる人々の敬虔なる同一化を促進する。この正面パネルは取りはずして三人の王の王冠をかぶった頭蓋骨を見せることができる（図3）。そのことにより三王礼拝の浮彫は、聖人たちの役割と聖遺物がいまここにあるという現前性をわかりやすく伝えるために働くような説明的な外観を与えられるのである。この現象の一例として、1340年頃に制作された写本の中で戴冠したばかりの皇帝ハインリヒ7世が1309年2月にケルンで三王の聖遺物に祈りを捧げた様子が描かれている<sup>4</sup>（図4）。この図はハインリヒとその妃マルガレーテが「ケルンの三王を拜んでいる」様子を示しており、聖遺物は完全に肉を回復した形で冠をかぶった頭として描かれている。それはあたかも聖遺物容器が示唆するような身体的再構成の知覚を視覚的に示すが如くである。

図3 ケルン大聖堂、三王の聖遺物容器（シュライン）正面、台形パネルを取りはずした状態

この図は、あらゆる聖遺物容器の形によって[聖人の]「現前」という概念が伝達されたことを明らかにしているが、このことは聖人の身体もしくはその一部分を視覚的に「肉付け」した聖遺物容器により一層ドラマティックかつ明白に示される。ヨーゼフ・ブラウンによって「話す聖遺物容器」という刺激的な呼称を与えられた、人（もしくはその一部分）の形をした聖遺物容器は、その伝達力の高さから、広く普及していた<sup>5</sup>。この種の聖遺物容器の中でも最も一般的な二つのタイプは、聖人の頭部（図5、6）もしくは腕（図7、8）、つまり会話とコミュニケーション

図4 コブレンツ、州立中央文書館、『皇帝ハインリヒ7世と選帝侯ルクセンブルクのボードワンの絵入り年代記』（1340年ごろ）の一葉、「三王の聖遺物を崇敬するハインリヒ7世とその妃」

図5 アムステルダム国立美術館  
聖テクラの胸像型聖遺物容器

図6 ジェール大聖堂（ハンガリー）  
聖ラディスラスの胸像型聖遺物容器

ンのための二つの主要な器官を再現したものであった。シンシア・ハーンが指摘したように、中に納められた聖遺物は、聖遺物容器が表している身体の一部と合致しないことも、少なからずある<sup>6</sup>。こうした身体の一部の形をした聖遺物容器は、ブラウンが定式化したように、中に納められた身体部位を象ることによって内容を明らかにするという模倣的手段としてのみ機能しているわけではない。その存在と *pars pro toto* [部分が全体と等価であるということ] によって聖人の身体の再構成とを聖遺物に主張させることにより、聖遺物と聖

遺物容器との間の結びつきを表明している。腕型聖遺物容器は、祝福の身振りに象られるのが専らで、そのために聖遺物／聖遺物容器が、信徒の祈りが求める祝福を視覚的に実演することが可能となる。これ以外のタイプの腕型聖遺物容器は、専ら祈りの身振りとして象られており、天上と地上との間の連絡役としての聖人の役割を視覚的に示唆している。同様に、頭の形をした聖遺物容器も信徒の祈りを見る眼と、聖人たちに向けられる祈りを聞く耳と、これらの祈りを天上に伝えるとともに天上からの応答を伝える口を持つことによって、観る者 [=信徒] との対話に加わる。こうした聖遺物容器は、祈りのドラマに積極的に加わり、実際に観る者に語りかけ、交流する。そうすることによって、観る者の眼の中で、聖人と聖遺物と聖遺物容器を一つに融合したものとしての認識を誘発したのである<sup>7</sup>。

聖遺物容器と信徒との間の対話のインタラクティブな性格は、アンジェのベルナルドによるオーリヤックの聖ジェラルドの人物像型聖遺物容器についての有名な記述の中で、大いに共感をもって詳細に論じられている。「その

図7(左) ニューヨーク、メトロポリタン美術館、聖ウァレンティヌスの腕型聖遺物容器

図8(右) サンクト・ペテルスブルク、エルミタージュ美術館、聖ヴァルベルトの腕型聖遺物容器

図9 コルク、聖フォワ教会、  
聖フォワの聖遺物容器

人物像の顔は非常に印象的に象られており、あたかもその射るような眼差しが観る者たちに向けられているとも、また時にまばたきをして嘆願者の願いを慈悲深く受け入れるとも感じる人々がいた<sup>8</sup>。その後続く聖フォワの聖遺物容器（図9）の擁護論からもわかるように、聖遺物の実在よりも、聖遺物容器と聖人および聖遺物との根本的な同一視と、さらには極めてわかりやすいやり方で聖人の現前という概念を示すことができる聖遺物容器の機能にベルチールの評価は負うところが大きい。

さらに、聖遺物と人体を象った聖遺物容器とがほとんど同一視されていたことは、中世を通じて教会の財産目録中で用いられていた用語からも裏付けられる。とりわけ、頭部を意味する *caput* という用語もしくはその変化形は、頭部と頭部型聖遺物容器の双方に、容器と内容物という差異をつけることなく、用いられていた。アミアン大聖堂の1347年の宝物目録にこのことは認められ、「*caput*」という同じ名詞が様々な聖遺物および聖遺物容器を指して繰り返し用いられている。

まず最初に、我々は洗礼者ヨハネの頭部を所有している……同様に、いとも聖なるフィルミヌスの頭部を黄金の杯の中に……同様にある女王の頭部と肩（の骨）を、黄金と真珠の王冠とともに。この頭部は、赤と緑

の石で装飾されており、イングランドの女王イザベルから贈られたものである。その中には聖ウルフィアの頭部が入っている。<sup>9</sup>

この洗礼者ヨハネの「頭部 caput」とは、第四回十字軍の折、1204年にコンスタンティノポリスから略奪され、アミアンにもたらされ大いに崇敬を集めた頭蓋骨である。<sup>10</sup>それはビザンチン・タイプの聖遺物容器で、頭蓋骨が直視できるようになっており、貴石が嵌め込まれた貴金属製のフレームに固定されている。聖フィルミヌスの「頭部 caput」とは、ピュクスに似た黄金製のカップ (cupa) に入れられた頭蓋骨のことである。<sup>11</sup>三つ目の品目は、肩についての記述を想起させるような、聖ウルフィアの銀製の胸像型聖遺物容器である。<sup>12</sup>興味深いことに、目録の記載は全く同じ用語 caput を、銀製聖遺物容器とその中に収められた頭蓋骨の両方について用いている。これらすべては、あたかもすべて頭に関連しているが故に同じと見なされているかのように、「頭部」として記述されている。このことはバーゼル大聖堂の1511年の財産目録によってもさらに裏付けられる。そこには「バーゼル司教パンタルスの頭部、首に神の子羊のメダルを掛けている」という記載がある。<sup>13</sup>聖遺物とそれが収められた胸像型聖遺物容器を共に同じ「caput」という言葉で表現している、財産目録の記述は、聖遺物と聖遺物容器が非常に密接に結びついており、本質的には同じもの、あるいは一つの物の分かちがたい二つの部分として認識されていたことを、示唆している。このことは、容器と区別することなく中に収められた聖遺物を記述した頭部型聖遺物容器上の銘文からもうかがうことができる。例えば、13世紀にリムーザン地方で制作されたケルンで殉教した聖ウルズラの侍女の頭部型聖遺物容器には「ここに一万一千人の乙女たちの内の一人の頭部がある」という銘文が施されている。<sup>14</sup>(図10)。この事例に見られるように、聖遺物容器のほとんどの銘文は、聖遺物容器についてではなく、聖遺物自体について言及しており、この二つが分離不可能なほどに結びついていたことを示唆している。<sup>15</sup>このような用語の流動性は、疑いなく、聖遺物と人体を象った聖遺物容器との融合の傾向を明らかにするとともに、その傾向に影響を与えもしているのである。

図10 アミアン、ピカル  
 デイ美術館  
 聖ウルズラの侍女の頭部  
 型聖遺物容器

聖遺物容器の中に入れてままで聖遺物を公開するという広く普及した実践は、もちろんこのような容器とその中の聖遺物との融合に影響を受けてのものであった。1215年の第四回ラテラノ公会議以降、聖遺物を聖遺物容器から取り出して公開することは厳しく禁じられた<sup>16</sup>。聖遺物を「むき出し」で公開した数多くの事例の存在は、この禁令が普遍的に遂行され、効力を有したわけではないことを明らかにしてはいるが、「容器に入れて in capsam」の公開が標準的であったことは、数限りない史料が示唆している<sup>17</sup>（図11）。確かに、これについては大いに実際的な理論的根拠があった。聖遺物が聖遺物容器に安置されていることにより、（偽の聖遺物を呈示するというような）詐欺への疑いを招く確率が低くなったのである。しかし、それと同様に重要であったのが、聖遺物を様々な形の聖遺物容器に収めて呈示することにより、聖遺物の輝かしさと現前性が根本的に増大したという点である。聖ボリュカルの『殉教録』において賞賛されているように、本当に聖遺物が「宝石よりも価値があり、黄金よりも素晴らしい」と受け取られたのであれば、宝石が嵌め込まれて光を放つ聖遺物容器は、聖遺物が極めて貴重であることを一層わかりやすくするために登場したと言えよう。このことは人体を象った聖遺物容器を鑑みると一層はつきりとする。そこでは、聖人の身体の表皮を装った、聖遺物容器の金属による（もしくは彩色された木材による）表面が、



図 11. ウルリヒ・フォン・リッヘンタール『コンスタンツ公会議年代記』より 2 点の挿絵

聖人の身体の表皮を表しており、それによって聖人の現前が文字通り「具体化」されたのである。

同様に、聖遺物を公開する行事も、聖遺物と聖遺物容器との知覚における融合を発展させ、同時にその融合から影響も受けていた。聖遺物の公開にもなって作成された版面を見ると、明らかに聖遺物容器を図示したイメージと聖遺物を記述したテキストを融合させる傾向が見て取れる。

1460 年に開催された 7 年に一度のアーヘン、マーストリヒト、コルネリムンスターにおける聖遺物公開行事に際して制作された巡礼版面（図 12）には、聖セルヴァティウスと聖コルネリウスの胸像型聖遺物容器の図が含まれ、そこに添えられたテキストでは、これらの容器が聖遺物自体と同一視されている。「一つ、これは聖セルヴァティウスの頭部の形である」、「一つ、これは聖コルネリウスの頭部および彼の右腕である」<sup>19</sup>。聖セルヴァティウス伝とマーストリヒトにおけるその聖遺物公開行事について記した同時代の木版本は、このような聖遺物としての聖遺物容器の呈示を裏付けている。<sup>20</sup> その

図12 マーストリヒト、アーヘン、  
コルネリミュンスターの聖遺物版画

図13 マーストリヒトの聖遺物展  
観の様子 (『マーストリヒトの聖遺  
物書』より)

最後の紙葉には、聖セルウァティウスの頭部が教会のバルコニーから呈示される、という聖遺物公開行事のクライマックスが示されている (図13)。テキストはこれを「聖セルウァティウスの頭部が……」と記しているが、図は明らかに胸像型聖遺物容器が高く掲げられている様子を示している。この聖遺物展観における言葉と視覚的形象による行事は、聖遺物容器を聖遺物として認識させ、あるいは肌と骨を不可分に結びつけて知覚させる度合いを促進させた。テキストが呈示の際に読み上げられる説明を反映していることを考慮すると、このことは注目すべきことと言えるだろう。

ハーバート・ケスラーは、ある物を見て、別のものを信じるという知覚上の現象について考究しているが、これは使徒トマスが（キリストの復活を一旦）疑って、しかる後に受け入れたのと同様に、見ることによって信じるようになるということの意味する<sup>21</sup>。ケスラーの議論は、神性の視覚化に焦点を置いているが、この議論は聖遺物と聖遺物容器との知覚の上での融合という現象にも適応できるかもしれない。この問題に関連して、聖遺物を聖遺物容器に入れて公開するという方法が聖遺物と容器との融合を促進させることを、私は別の機会に指摘したことがある<sup>22</sup>。フルムスの聖ユストゥスが自らの首を抱え持つ胸像型聖遺物容器（図 14）の珍しい形式を分析しながら、私は、この聖遺物容器の形式と、この聖人の「受難伝」の内容と、聖遺物顕示の演劇的性格との間の照応が、聖遺物と聖遺物容器の融合ばかりか、時間の融合をももたらすことを指摘した。聖人の殉教という遙か過去の出来事が、崇敬と接吻という現在の行為の中で命を与えられたのである。このあまりほかに見られない形式の聖遺物容器は、この聖人の「殉教録」に述べられているように、9歳で殉教した少年聖人が（別れの）接吻のために母の許にまで運んでくれるように自らの頭を父親に差し出す様子を表している。それゆえ、この聖遺物容器は、彼自身の聖遺物への礼拝を主導して、聖遺物への接吻を促すがごとくに、聖人を表現しているのである。聖人の祝日や特別公開行事の

図 14 フルムス、聖ユストゥス  
教会、聖ユストゥスの胸像型聖遺物容器

折に、フルムスの聖ユストゥス教会の祭壇上に置かれた際、この聖遺物容器は、信者が自分をこの聖人の頭に接吻し祈った彼の母親と重ね合わせるよう導くべく、ひざまずいて差し出された頭部に接吻をするよう信者に促したものと思われる。上方を見上げると、ヴォールトの要石のところに描かれた絵に、切断された聖人の頭部が母親に接吻を促している様子を見ることができた。このような演劇的な行為の中で、この聖人は、地上にも天上にも現前しているかのように視覚化されており、彼の殉教という過去は、彼自身を救済への道として提供しているかのように、永遠に「いま」であり続ける儀式化された礼拝という行為において、再演されているのである。したがって、これは、聖体拝領の際に知覚される時間と空間および聖体と聖血に実体変化したパンとぶどう酒との融合に似ていなくもない。祭壇上で定期的になされた聖遺物／聖遺物容器のディスプレイは、さらに、この知覚上の融合を促進させたことであろうし、「キリストに倣う」という観念を浸透させたのである。

聖遺物と金属製聖遺物容器という外皮とのこのような融合は、胸像型聖遺物容器の場合非常にわかりやすいものとなるが、その他のタイプの聖遺物容器もまたこのような知覚上の現象を促進させる。トリーア大聖堂宝物館が所蔵している10世紀に制作された素晴らしい携帯用祭壇でもある聖アンドレのサンダルの底を納めた聖遺物容器（通称『エグベルトのシュライン』(図15)は、この漁師出身の使徒の黄金の片足を呈示しており、それによって彼は天上的な履物の輝かしいモデルとして作りなおされたサンダルを履けるのである。しかし注意深い観者は、このサンダル像には、底がないことに気付くだろう。このサンダルは底を欠いているのである。サンダル像に欠落しているこの部分は、実のところ実在していた。というのもこの聖遺物容器の中身こそ、聖アンドレのサンダルの底だったのである。それゆえ、このサンダルは、聖遺物と聖遺物容器との融合によって完全なものになり、この聖遺物容器の足は、実際に完全なサンダルを履いていることになる。この足が「pars pro toto」という概念によって聖人を完全な形で表している一方で、サンダルは聖遺物においてその完全な形を回復している。この超自然的な再構成によって、サンダルは完全なものとなり、(聖人の)身体も完全

図15 トリーア大聖堂宝物館、『聖エグベルトのシュライン』

なものとなり、そして聖人も完全なものとなる。いわば Sole (底) から Soul (魂) へと至ると言えるかもしれない。この聖遺物容器を見る者は、崇高で天上的な栄光へと変容させられたこの使徒のサンダルを、文字通り見るように、誘われる。そのサンダルは、実際には粗末で貧弱な素材で作られていたのだが、天上的な栄光に包まれている方がリアルに映るのである。聖人は黄金の肌と衣装に包まれて呈示されるわけだが、これは天上的恩恵と死に対する勝利を視覚的に明示しているのであり、この聖遺物容器は、感覚を超越した聖人伝の理念を伝えるために諸感覚を援用してこの超越的な真理(天上的恩恵と死に対する勝利)の明白な証拠を呈示しているのである。その際、超越的な聖人伝の理念を伝えるために諸感覚を利用させている。この聖遺物容器上の黄金の足の表現は、サンダルの底という副次的聖遺物による聖人の現前の示唆であるだけでなく、聖遺物と聖人との、また聖遺物と聖遺物容器との密接な関係を、一つのアイデンティティー(エンティティー) [原文では (id)entity] に視覚的に融合するような、視覚的な強調でもあるのである。これこそが人物像型聖遺物容器の驚くべき力、知覚と理解という行為を方向付ける能力なのである。

聖遺物と聖遺物容器と典礼儀式における印象的な視覚的かつ概念的融合のさらなる事例は、祝福を与える際の司教による腕型聖遺物容器の利用にも見

ることができる。シンシア・ハーンが指摘したように、司教が腕型聖遺物容器を持って祝福を与えるという行為は、ただ単に聖遺物容器／聖遺物を動かしたというだけではなく、司教の役割が聖人の主たるスポーツマンであることを強調していた<sup>25</sup>。2001年の9月にテキサス州フォート・ワースのキムベル美術館においてマース地方の12世紀の腕型聖遺物容器（図16）を調査した際、私はこうした容器によってどのように祝福を与えたのかを試す機会を得た<sup>26</sup>。どのようにその行為が見えたかに関連して、とりわけ私はこの種の腕型聖遺物容器が祝福を与えられる際にどう掲げられうるのかという点に興味を抱いていた。それまで私はいささか素朴に、司教が単純に両手で聖遺物容器の底を持って高く掲げるのだらうと推測していた。ところが驚いたことには、そのような持ち方では極めて不安定であり、祝福という厳粛な行為には不適切であることがわかった。腕型聖遺物容器をしっかりと支えながら、祝福の十字を切るためには、左手で容器を下から持ち、容器の手首の部分を後ろから右手で支えなければならないことを、私は発見した。その時電光のような閃きが私を見舞った。腕型聖遺物容器は司教自身の腕の延長のように見えたのではないだろうか。司教と聖人とが、身体と聖遺物とが、そして聖遺物と聖遺物容器とがこのような演劇的儀式の中で視覚的に融合したのであ

図16 フォート・ワース(テキサス州)、キムベル美術館、腕型聖遺物容器

る。このような聖遺物と聖遺物容器と仲介者たる聖職者との宗教儀礼を通じての融合は、聖遺物が、その聖遺物容器という外皮との不可分な関係によって示されているように、ダイナミックな生命力を持つという印象を強化したのである。

ハンス・ベルティンクは、イメージをともなった聖遺物容器と聖遺物とは、互いに互いを説明しあうことを指摘した。聖人の現前<sup>27</sup>という事実と融合し、その一部となることによって、聖遺物容器の造形は、聖遺物における聖人の現前という根本的真理を示している。その結果、聖遺物容器が聖人の骨を覆う文字通りの肌となることによって、また、単なる容器ではなく聖遺物の暗黙の一部となることによって、容器は聖なる存在の实在の中に融合する。聖遺物とはまさに聖人そのものであるので、聖遺物容器は次第に聖遺物と相互に結びつくにつれ、聖人の視覚的、身体的、実質的な出現となる。敬虔な嘆願者から定期的に見つめられる聖遺物容器は、(聖人の) 現前についての理解を具象化しただけではなく、聖人のパワーと現前を証明する様々な奇蹟が起きるという効能(ご利益)を明示しながら、安全に保管された聖遺物の神秘的なパワーを視覚的に具体化しているのである。黄金の肌は、光を放つ骨のパワーとその輝かしい栄光を、保護するとともに示しているのである。

## ■註

- 1 “Hic conditus est sanctae memoriae Martinus episcopus cuius anima in manu Dei est, sed hic totus est Praesens manifestus omni gratia virtutum.” (E. Le Blant, *Les inscriptions chrétiennes de la Gaule*, Paris 1856, I: p.240.) 英語訳は Peter Brown, *The Cult of the Saints. Its Rise and Function in Latin Christianity*, Chicago 1981, p.4 ある。
- 2 Gregory of Nyssa, *Encomium on Saint Theodore*, in: *Patrologia Graeca*, 46, 740B. 英語訳は Brown, 1981, p.11 にある。
- 3 このシュラインの正面については Joseph Horster, “Zur Form der Stirnseite des Dreikönigenschreins”, in: *Miscellanea Pro Arte, Hermann Schnitzler zur Vollendung des 60. Lebensjahres am 13. Januar 1965*, Joseph Hoster and Peter Bloch, eds, Düsseldorf 1965, pp.194-217 を参照のこと。

- 4 Koblenz, Staatsarchiv, Hs.1 C No. 1. Joachim M. Plotzek in: *Rhein und Maas. Kunst und Kultur 800-1200*, Anton Legner, ed., Cologne 1972, pp.396-397 を見よ。ドイツ王の戴冠式において三王の聖遺物への崇敬が果たした役割については Scott B. Montgomery, *The Use and Perception of Reliquary Busts in the Late Middle Ages* (Ph.D. dissertation, Rutgers University, 1996), pp.181-183 を参照のこと。
- 5 Joseph Braun, *Die Reliquiare des christlichen Kultes und ihre Entwicklung*, Friburg im Breisgau 1940.
- 6 Cynthia Hahn, "The Voices of Saints: Speaking Reliquaries", *Gesta*, XXXVI/1 (1997), pp.20-31.
- 7 このことについては Montgomery, 1996, pp.72ff. を参照のこと。
- 8 *Liber miraculorum Sanctae Fidis, publié d'après le manuscrit de Schlestadt avec une introduction et des notes*, A. Bouillet, ed., Paris 1897. 英語訳は Ellert Dahl, "Heavenly Images: the Statue of St. Foy of Conques and the Significance of the Medieval 'Cult-Image' in the West", *Acta ad archaeologiam et atrium historium pertinentia*, VIII, 1978, pp.175-191, p.177にある。ほかに Pamela Sheingorn, trans. and ed., *The Book of Sainte Foy*, Philadelphia 1995, pp.77-78 にも別の英語訳がある。
- 9 "In primis habemus caput beati Johannis Baptiste...Item caput beatissimi Firmini martyris in cupa aurea...Item caput regine cum scapulis argenteum dearatum corona aurea coronatum et margaritis. Et alii lapidibus rubies et viridibus quod obtulit Ysabellis regina Angliae in quo est caput be Ulfie." (J. Garnier, "Inventaires de la cathédrale d'Amiens publiés d'après les manuscrits," *Mémoires de la société des antiquaires de Picardie*, 10, 1850, pp.229-391, op. 254.) ほかに Birgitta Falk, "Bildnis-reliquiare. Zur Entstehung und Entwicklung der metallenen Kppf-, Büsten- und Halbfigurenreliquiare im Mittelalter," *Aachener Kunstblätter*, 59, 1991-1193, pp.99-238, p.141; Montgomery, 1996, p.247ff. も参照のこと。
- 10 Ch. Du Cange, *Traité historique du chef de Saint Jean-Baptiste*, Paris 1665; Isabel Combs Stuebe, "The Johannisschüssel: From Narrative to reliquary to Andachtsbild," *Marsyas*, XIV, 1968-69, pp.1-6, p 2ff.
- 11 このタイプの聖遺物容器については Braun, 1940, p.50f. を見よ。
- 12 この聖遺物容器は寄進者であるイングランドのイザベッラが亡くなる 1329 年以前に制作されたはずである (Falk, 1991-1993, p.160, cat.20.)。
- 13 "Caput sancti Pantali episcopi Basiliensis ecclesie mit einem agnus dei in collo." 1275 年前



- 後に制作されたと思われるこの聖遺物容器はバーゼル歴史博物館に所蔵されている (INV. Nr. 1882-37)。Brigitte Meles, ed., *Der Basler Münsterschatz*, Basel 2001, pp.64-66, cat. 14; Timothy Husband, *The Treasury of Basel Cathedral*, New York/New Haven 2001, pp.108-109; cat.39; Falk, 1991-93, pp.209-211, cat.53 を参照のこと。
- 14 “HIC EST CAPVT VNID.VNDECIM MILIBVS VIRGINVM ET MARTIRV” この胸像型聖遺物容器は現在アミアンのピカルディ博物館に所蔵されている (Inv. No. 357. 189.51)。Barbara Drake Boehm, *Medieval Head Reliquaries of the Massif Central* (Ph.D. dissertation, New York University, 1990), pp.184-190; Falk, 1991-93, p.155, cat.13 を参照のこと。ほぼ同一の銘文がブリヴ＝ラ＝ガイヤルドの教区教会所蔵の聖エッサンスの胸像型聖遺物容器上に認められる (Boehm, 1990, pp.197-199; Falk, 1991-93, p.155, cat.14)。その他の例については Scott B. Montgomery, *Corporate Identity. Relics, Reliquaries and the Visual Culture of St. Ursula and the Eleven Thousand Virgins of Cologne*, Witney 2009; Montgomery, 1996, p.252 を見よ。
- 15 Johann Michael Fritz, *Goldschmiedekunst der Gotik in Mitteleuropa*, Munich 1982, p.95.
- 16 “ut antiquae reliquae amodo extra capsam not ostendantur, nec exponantur venales...” G. Mansi, ed., *Sacrorum consiliorum nova et amplissima collectio*, 55 vols., Florence and Venice, 1757-1798 (reprinted in Paris, 1903-1927), XXII, cols.1049-1050. Montgomery, 1996, pp.110ff. も参照せよ。
- 17 この規定がどの程度遵守されたかについては意見が分かれている。モレッティは聖遺物の剥き出しでの呈示の禁止は、一貫して守られたと見ている (P. Moretti, *De ritu ostensionis sacrarum reliquiarum*, Rome 1721, p.77) が、エルマン＝マスカールは、1215年の禁令の後にも剥き出しでの呈示が行われた事例に言及しつつ反論している (Nicole Hermann-Mascard, *Les reliques des saints. Formation coutumière d'un droit*, Paris 1975, p.216.)。私は、普遍的というわけではなかったとしても、実際にほとんどの場合展覧行事が聖遺物容器に入れたままで行われたと論じたことがある (Montgomery, 1996, p.110ff)。
- 18 この現象についての優れた議論が Brigitte Buettner, “From Bones to Stones – Reflections on Jeweled Reliquaries”, Bruno Reudenbach and Gia Toussaint, eds., *Reliquiare im Mittelalter* (Hamburger Forschungen zur Kunstgeschichte: Studien, Theorien, Quellen, 5.), Berlin 2005, pp.43-59 に見られる。
- 19 “Item also ist Sant Servois houbt gestalt...” “Item dasz ist Sant Cornelius houbt und sin rechter arm.” W. Schmidt, “Beiträge zur Geschichte der Heilighthunsfahrten von Aachen,

- Cornelimünster und Maestricht. I. Die älteste Holzschnittdarstellung der Heiligthümer von Maestricht, Aachen und Cornelimünster”, *Zeitschrift des Aachener Geschichtsvereins*, 7, 1885, 125-126; Montgomery, 1996, pp.134-135 を参照のこと。
- 20 A.M. Koldewej and P.N.G. Pesch, eds., *Het Blokboek van Sint Servaas. Facsimile met commentaar op het vijftiende-eeuwse Blokboek de Servaas-Legende en de Maastrichtse Relieffentoning (Le Livre xylographique de Saint Servais, Fac-similé avec commentaire sur l’ostension des reliques à Maestrichte)*, Utrecht 1984; Scott B. Montgomery, “Relics and Pilgrimage in the Xylographic Book of St. Servatius of Maastricht,” in: *Art and Architecture of Late Medieval Pilgrimage*, Sarah Blick and Rita Tekippe, eds., Leiden 2005, pp.669-691 を参照のこと。公開行事におけるこの現象についてのより包括的な議論については Montgomery, 1996, pp.103-245 を参照せよ。
- 21 Herbert Kessler, *Spiritual Seeing. Picturing God’s Invisibility in Medieval Art*, Philadelphia 2000, pp.104-148;
- 22 Montgomery, 1996 に加えて、Scott B. Montgomery, “Mittite capud meum..ad matrem meum ut osculatur eum: The Form and Meaning of the Reliquary Bust of St. Just,” *Gesta*, XXXVI/1 (1997), pp.48-64 を参照せよ。
- 23 Anton von Euw and Hiltrud Westermann-Angerhausen in: *Rhein und Maas*. 1972, p. 177 C.1; Dagobert Frey, “Der Realitätscharakter des Kunstwerkes”, in: *Kunstwissenschaftliche Grundfragen. Prologomena zu einer Kunstphilosophie*, Vienna 1946, pp.107-149. を参照のこと。
- 24 ここでは、(id)entity という用語によって、この聖遺物容器における異なる諸要素（祭壇、足、サンダル、聖遺物）が同一の集合的アイデンティティーを共有するという点で相關すると見なす知覚のあり方を示唆すべく意図的に用いている。[entity には実在するモノあるいは実在という意味がある。]
- 25 Hahn, 1997 を見よ。
- 26 Kimbell Art Museum, Inv. AP.1979.25. この聖遺物容器は、1150 年から 1200 年の間に、マース地方（あるいはリエージュ？）において制作されたものと思われる。
- 27 Hans Belting, *Likeness and Presence. A History of the Image before the Era of Art*, trans. Edmund Jephcott, Chicago 1994, p.302.

(スコット・B・モントゴメリー／Scott B. Montgomery デンヴァー大学助教授)